

第26期 株主通信

2008 Business Report 2008.1.1-2008.12.31

Inspiration for Life Science

TO OUR SHAREHOLDERS

株主の皆様へ～新社長就任のお知らせ

株主の皆様には、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素はコスモ・バイオ事業運営に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。
ここに、第26期株主通信をお届けしますので、ご高覧賜りますようお願い申し上げます。



写真 新代表取締役社長 笠松 敏明(左)と取締役会長に就任した原田 正憲(右)

新社長就任のお知らせ

2009年3月26日付で、前代表取締役社長の原田正憲は、取締役会長に就任し、新代表取締役社長に、笠松敏明（前常務取締役経営企画室長）が就任いたしました。前代表取締役社長原田正憲は、今後新体制をバックアップいたします。

コスモ・バイオは、経営トップの若返りを図り、新しい経営体制の下、時代の変化に対応しながら安定した経営基盤の確立といっそうの企業価値向上を目指します。

新代表取締役社長の略歴

氏名	笠松 敏明	略歴	昭和48年 関西石油株式会社（現コスモ石油株式会社）入社
生年月日	昭和26年2月2日生		平成14年 当社販売促進部長
出身地	奈良県		平成16年 当社経営企画室長
最終学歴	関西大学工学部卒業		平成18年 当社取締役経営企画室長
			平成20年 当社常務取締役経営企画室長

TOP INTERVIEW

トップインタビュー

新体制で活力ある企業へ。
ブランド力の強化と
高付加価値事業の育成を図り、
強固な収益基盤を築きます。

取締役会長

原田 正憲

代表取締役社長

笠松 敏明

Q この度の株主総会で原田正憲前社長が取締役会長に就任され、笠松敏明新社長へバトンタッチされました。

原田会長にこれまでのコスモ・バイオの歩みを振り返り、改めてコスモ・バイオの成長の源泉についてお聞きしたいと思います。

原田 当社の創業当時は、社員が自らの足でお客様の所へ伺い、試薬に関するあらゆる細かいニーズを直接収集し、求められている試薬を調達して提供するという地道な作業を繰り返していました。徐々に事業規模が拡大し、国内および海外に代理店を介した販売体制を築くようになった今でも、創業当時の「お客様の真のニーズを知る」という基本姿勢に変わりはありません。当社の使命は、最終ユーザーである研究者のニーズを的確にとらえ、本当に必要とされている最適な試薬を世界中で開拓した仕入先から見つけ出し、タイムリーに提供することにあります。このようなバイオ専門商社に求められる役割を忠実に実践してきたことが評価され、安定成長につながったと考えています。当社は、国際的なネットワークと業界屈指の情報力を生かし、世界のお客様から一層信頼される企業として、今後もライフサイエン

ス研究の支援に取り組んでいきます。今回、経営トップの若返りを図り、新体制で臨んでまいります。今後とも引き続き皆様方のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

Q 笠松新社長の社長就任にあたっての抱負をお聞かせください。

笠松 コスモ・バイオは、「ライフサイエンスの進歩・発展に貢献する」ことを第一の企業理念に掲げ、人々に信頼される企業づくりを推進してきました。新体制においても、コスモ・バイオの源流である企業像を踏襲しながら、これまで築き上げた経営基盤の上で新たな成果を生み出していく時期であると感じています。ライフサイエンス分野は非常に環境変化の激しい業界ではありますが、変化をうまくとらえることでビジネスチャンスに結びつけることが可能になります。新たな事業分野の開拓により、当社の優位性をより強固な形で表面化できるように取り組んでいきたいと考えています。また、ライフサイエンス分野という社会的意義の大きな事業展開を行っている現状を認識し、CSR活動に意欲的に取り組み、より積極的に社会貢献を果たしていきたいと考えています。

Q 業界の市場環境と併せて、2008年12月期の業績についてお聞かせください。

原田 当社はライフサイエンス分野というニッチ市場で確固たる地位を築いているため、景気後退感による悪影響は比較的少ないほうではないかと思えます。しかしながら、製薬メーカーのM&Aによる研究所の統合、海外製薬企業の国内研究拠点の閉鎖など、取引先の業績低迷の影響を少なからず受けて、2008年12月期連結売上高は56億22百万円（前期比4.8%減）となりました。海外主要仕入先の一部が日本現地法人へ販売ルートの変更を行ったことによる取扱額の減少も大きく影響しました。また、コスモ・バイオ単体で事業展開している機器販売の輸出が法規制の影響で大幅に落ち込むなど、マイナス材料が重なりました。利益面では、円高差益による仕入価格の低減効果が見られましたが、競合との価格競争の激化を受けて、営業利益4億47百万円（同23.2%減）、経常利益4億64百万円（同2.2%減）と減収減益を強いられました。子会社株式会社プライマリーセルののれんの減損損失を特別損失に前倒しで計上したため、当期純利益は1億4百万円（同57%減）と大幅に減少しました。

当社を取り巻くバイオ研究関連市場は、中長期的には強含みで推移すると見られていますが、大学・公的研究機関の予算使用

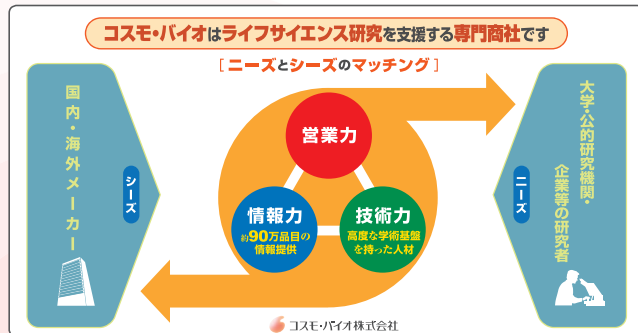
手続きの厳格化など当面は引き締めの傾向が続きます。しかし、引き続き政府がライフサイエンス関連産業に重点的な予算を割く見込みであるほか、最先端研究分野には民間企業の重点的な投資が行われる見通しです。当社は、大学関連の研究予算動向を注視しながら、グローバルな新薬開発競争を繰り広げる製薬企業向けに積極的な需要開拓のチャンスを見出していく方針です。

Q 2009年12月期の見通しについてはいかがでしょうか。

笠松 2009年12月期は、バイオ研究関連の予算執行の引き締め傾向が続くと予測されることから、連結売上高は53億39百万円（2008年12月期比5.0%減）を見込んでいます。バイオ関連研究市場は拡大基調とはいえ、業界の販売競争はさらに激化すると考えられます。当社は品揃えの豊富さ、きめ細かな情報提供サービスという強みを発揮しながら、競合との価格競争を打破していく方針です。連結営業利益は3億41百万円（同23.8%減）、連結経常利益は3億71百万円（同20.1%減）を見込んでいます。特別損失が消滅するため、当期純利益は2億16百万円（同106.8%増）となる見通しです。数字面では厳しい予想を立てていますが、市場環境低迷のマイナス影響は今期で一段落するものと見ており、この機会に足腰の強い企業体質を築いていきたいと考えています。

製薬企業においては、基礎研究から製品化に近い段階の応用研究・開発研究へと研究開発活動のシフト傾向が強まっています。当社では、こうしたニーズの変化をいち早くとらえ、2005年から創薬支援サービスを展開してきました。年々売上高が倍増する成長事業に育ってきましたが、4年目に入り事業基盤が一層強化されたことで、2009年12月期は利益貢献が期待できます。

また、当社の仕入先が2006年をピークに減少傾向にあります。これは海外の仕入先が自社で日本に販売拠点を設けるなど取引条件を変更することによる影響です。仕入先が日本の現地法人や日本で



当社ビジネスモデル概要

の独占販売会社を持つ企業に買収された場合には、当社の取扱商品の販売停止や仕入価格上昇を招いてしまいます。こうした影響を軽減するために今期は新たな有力仕入先の開拓に力を入れることはもちろん、既存の仕入先、販売代理店両方との関係強化を図り、仕入先減少に歯止めをかけ、売上を伸ばしていきたいと考えています。

Q コスモ・バイオの飛躍に向けての可能性および課題についてお話しください。

笠松 当社の最大の強みは、国内外の仕入先とのネットワークを通じた品揃えの豊富さです。単に国内トップの品揃えを誇るだけではなく、お客様のあらゆるニーズに応えた「商品」と「サービス」、そして「情報」を提供できる体制を築いていることが、当社の真の優位性といえます。今後はこの優位性をいかに強力に打ち出して事業展開できるかが成長に向けてのカギを握ることになります。当社の強みを一層磨くためには、より質の高い商品を世界中から仕入れ、商品力を向上させることはもちろん、自社ブランド品の強化により付加価値の向上を図るこ

とが課題になってきます。これまで自社ブランド品は国内中心に展開してきましたが、最近、海外市場向けにも当社の独自ブランド商品が売り上げを伸ばしています。グローバル展開を図る当社にとって、世界に向けての知名度向上は、将来の飛躍を見据えての大きなチャンスであると認識しており、今後ブランド力の強化に全社一丸となって取り組む方針です。

また、当社はバイオ専門商社ですが、企業価値の向上のためには今後メーカー機能を強化していくことが課題として挙げられます。当社は細胞事業を展開している株式会社プライマリーセルを2008年7月に完全子会社化しました。今後は株式会社プライマリーセルを自社研究拠点として活用することで、他の商社との差別化が可能になり、お客様からの信頼性向上に大きく前進すると期待しています。



●インターネット

インターネットホームページでは、90万件以上の全商品検索をはじめ、新商品情報や最新のトピックス等をご紹介します。さらに、お客様のニーズに合わせたメールマガジンの配信も行っております。またIR情報には、開示資料や証券情報、よくあるご質問等を掲載しており、随時更新しております。



<http://www.cosmobio.co.jp/>

●カタログ類

当社では2万部以上のカタログを、日本国内の研究者に広く配布し、研究に必要な商品を簡単に見つけることができますようにしております。



●ニュース、チラシ類

新商品の紹介等をするコスモバイオニュース（年6回発行）を無料配布し、よりスピーディーでタイムリーな情報提供に努めております。また、注目される研究分野や商品群にスポットを当てた特集ニュース、チラシ類も年数回発行しております。



●セミナー

当社ではお客様のためのセミナーやトレーニングを行っております。また、販売代理店のスタッフを対象にしたセミナーを、春と秋に開催しております。



●学会・展示会

分子生物学会、生化学会、免疫学会、農芸化学会等の学会のほか、海外やライフサイエンス関連の展示会に積極的に参加して商品とサービスのご紹介しております。



Q 新体制で取り組む事業戦略について教えてください。

笠松 子会社株式会社プライマリーセルとのシナジー効果の発揮により、細胞関連事業を強化していく計画です。細胞事業はメタボリック・シンドロームや糖尿病など社会問題化している成人病対策の研究のほか、化粧品、健康食品など医薬品以外の分野の研究にも膨大な潜在需要が期待できます。また、収益柱の一つである機器販売の強化にも取り組みます。子会社化するビーエム機器株式会社の人材を増強するなどグループ力強化に努め、主力の試薬販売との相乗効果を狙う方針です。さらに輸出販売の強化にも取り組みます。コスモ・バイオのブランド力を強化することが世界での知名度向上につながり、今後のグローバル展開に弾みをつけていくと考えています。

Q 原田会長が新体制に期待することについてお聞かせください。

原田 当社は経営理念として「ライフサイエンスの進歩・発展に貢献する」、「お客様に役立ち、信頼される」、「従業員を大切にする」の3つの柱を掲げています。これらを具現化するためにも、原点に戻って、専門知識を駆使した「商品情報」、世界中から収集した最先端の「技術情報」と、多種多様な研究者の「ニーズ」を効率的にマッチングさせる機能の充実にも力を入れてもらいたいと思います。また今後、バイオ専門商社として社会的意義の大きい新規事業分野への進出を期待しています。現在、世の中はエ



コブームですが、当社はバイオ技術に特化した環境保全分野など、自社の優位性を生かした事業展開を進めていくべきであると考えます。そして最も重要なことは経営理念の3つ目の柱である従業員を大切にすることを企業であり続け

ることです。新体制では若い従業員のモチベーション向上を図り、コミュニケーションの充実と経営参画意識を植えつける取り組みをはじめ、人材育成面で大いに期待を寄せています。

Q 笠松新社長が新体制で特に力を入れて取り組む人材育成についてご説明ください。

笠松 今後当社が安定的に成長するために重要なのは、人材の育成であると考えています。具体的な取り組みとしては第一に、チャレンジ精神あふれる企業風土を社内に醸成していく方針です。この実現のための布石として、このほど新たに社員提案制度を設けます。環境変化の激しいライフサイエンス分野において、柔軟性のある若い社員からの事業アイデアを経営に役立てていこうと考えております。第二に、子会社や出資会社との事業シナジーの創出を目指し、グループ企業間で人材交流を行う方針です。人材交流による横の連携を進めることでグループ力を一層強化し、組織一丸となり次の成長ステージに進んでまいります。

Q 最後に、株主様へのメッセージをお願いします。

笠松 当社は、株主に対する利益還元を経営の重要な課題とし、継続的な成長に向けての投資や社内留保とのバランスを考え、引き続き安定配当を目指します。目安として、当期純利益の3分の1を当面の設備投資、3分の1を将来的な投資に向けての社内留保とし、残りの3分の1を配当に充当する方針です。2008年12月期は、のれんの減損損失を計上しましたが、当社の中長期的な業績に影響を及ぼさないため、1株当たり年間配当は1,100円とさせていただきます。高水準な配当の維持のため、安定的な業績を確保し持続的な利益成長を遂げていかなばなりません。今後も財務体質の強化を図りながら、高付加価値事業の育成により、コスモ・バイオは飛躍を続けてまいります。株主の皆様におかれましては、当社の経営および事業に対し、ますますのご理解とご協力を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

コスモ・バイオグループ 各社とのシナジー

当社はコスモ・バイオグループ各社と連携を深め相互の事業の拡大を目指します。

 コスモ・バイオ株式会社

海外展開の拠点

細胞事業促進の中核

機器販売の強化

株式会社 プライマリーセル

連結子会社 (100.0)
資本金 100百万円

初代培養細胞(プライマリーセル)の研究開発・
製造・販売および細胞を用いた受託試験

COSMO BIO USA, INC.

非連結子会社 (100.0)
資本金 \$100,000

・輸出商品の北米での販売
・北米を中心に新規商品・仕入先の検索

ビーエム機器株式会社

持分法適用関連会社 (30.0)
資本金 49百万円

バイオ研究用の消耗品、機器類の輸入販売

本関連図は平成20年12月31日現在のものです。各グループ会社のカッコ内の数字は、出資比率(%)となります。

TOPICS トピックス

当社のIR活動

当社では、投資家の皆様に広くコスモ・バイオを知って頂き、事業内容を理解して頂くために、IR活動に力を入れております。

ノムラ資産管理フェアに出展

当社は2008年12月5日・6日に有楽町・東京国際フォーラムにおいて開催された「ノムラ資産管理フェア」に今年も出展いたしました。ノムラ資産管理フェアは、2日間でのべ2万人以上の来場者が訪れる、国内最大規模の個人投資家のためのマネーイベントです。当社出展は2005年以来4回目となります。当社ブースにも2日間で2000人を超える方にお越し頂きました。

一般個人向け会社説明会の開催

当社は、2008年9月9日に開催された社団法人日本証券アナリスト協会主催の「第7回一般個人向け会社説明会」に参加いたしました。当日は60名を超える個人投資家の皆様にお越し頂きました。



写真 ノムラ資産管理フェア 当社ブース

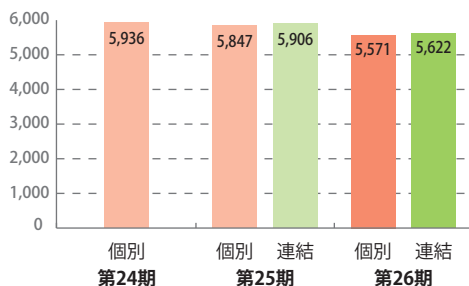
BUSINESS OVERVIEW

事業の概況

財務ハイライト

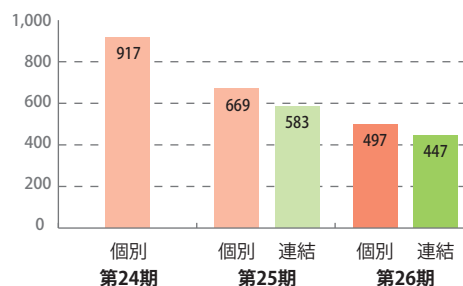
売上高

単位：百万円



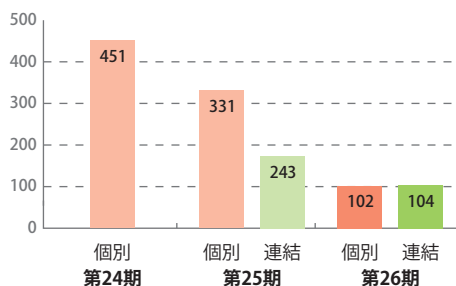
営業利益

単位：百万円

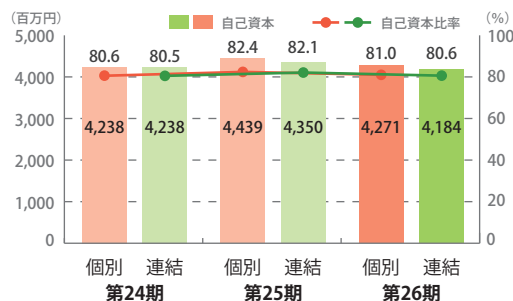


純利益

単位：百万円



自己資本／自己資本比率



当連結会計年度におけるバイオ研究関連の動向は弱く厳しいものでありました。そのため業界における販売競争は激化し、一部では価格競争も激しさを増しております。

当社は有力仕入先や商品の開拓・育成に努め、仕入先との関係強化、顧客への高度な情報サービス提供力の向上および企業向け販売を推進してまいりました。またサービス面においては、バイオ研究の先端分野関連商品の導入に努め、新たに45社の国内・海外の仕入先の商品を取り扱うようになりました。そして、円高傾向が続いたことにより仕入

価格が低下したものの、当社海外主要仕入先の一部の取引条件の悪化により、連結売上高は対前年比4.8%減の5,622百万円（前年実績5,906百万円）となりました。

利益面では、連結営業利益は対前年比23.2%減の447百万円（前年実績583百万円）、連結当期純利益は対前年比57.0%減の104百万円（前年実績243百万円）となりました。

特別損益につきましては、関係会社株式に係るのれんの減損損失281百万円を特別損失に前倒しで計上しました。

FINANCIAL STATEMENTS 1

連結財務諸表 1 (要約)

連結損益計算書

(単位：百万円)

科目	期別	第26期 自2008年1月1日 至2008年12月31日	第25期 自2007年1月1日 至2007年12月31日
【経常損益の部】			
営業損益の部			
売上高		5,622	5,906
営業費用		5,175	5,323
売上原価		3,399	3,650
販売費および一般管理費		1,775	1,672
営業利益		447	583
営業外損益の部			
営業外収益		106	19
営業外費用		90	127
たな卸資産廃棄損		72	72
デリバティブ評価損		7	50
その他		10	4
経常利益		464	475
【特別損益の部】			
特別利益		2	18
特別損失		281	4
税金等調整前当期純利益		185	488
法人税、住民税および事業税		85	250
法人税等調整額		△5	△5
当期純利益		104	243

①特別損失

連結子会社である株式会社プライマリーセルにおきまして、当初の事業計画で想定していた収益状況に遅れが見られたため、個別決算で同社に係る関係会社株式評価減を328百万円（約9割減）、連結決算では同社に係るのれんの減損損失281百万円を特別損失に前倒しで計上いたしました。

②資産

流動資産につきましては、資金運用を行っていた定期預金・社債が満期・償還を迎えたことにより現預金が1,005百万円になった一方で、売上債権（受取手形および売掛金）が前連結会計年度比117百万円減の1,728百万円となったこと等により、当期首の3,723百万円から204百万円増加して3,927百万円となりました。

有形固定資産につきましては、当期首の60百万円から償却等により8百万円減少して52百万円となりました。

無形固定資産につきましては、関係会社株式の評価損によるのれんの減損を行ったことによる281百万円の減少を主因に、当期首に比べ211百万円減少の180百万円となりました。

連結貸借対照表

(単位：百万円)

科目	期別	第26期 2008年12月31日現在	第25期 2007年12月31日現在
【資産の部】			
流動資産		3,927	3,723
現金および預金		1,005	618
受取手形および売掛金		1,728	1,845
有価証券		600	700
たな卸資産		484	505
その他		107	52
固定資産		1,267	1,578
有形固定資産		52	60
無形固定資産		180	391
投資その他の資産		1,034	1,126
投資有価証券		432	587
関係会社株式		304	301
その他		295	236
資産合計		5,194	5,302
【負債の部】			
流動負債		666	736
支払手形および買掛金		405	513
短期借入金		20	20
その他		240	201
固定負債		343	215
退職給付引当金		149	130
役員退職慰労引当金		94	79
その他		98	5
負債合計		1,009	951
【純資産の部】			
純資産合計		4,184	4,350
負債・純資産合計		5,194	5,302

②

③

投資その他の資産におきましては、運用を行っていた投資有価証券の償還を主因に、当期首に比べ91百万円減少して1,034百万円となり、以上の結果、固定資産は当期首の1,578百万円から311百万円減少して1,267百万円となりました。

以上の結果、連結総資産は当期首の5,302百万円から107百万円減少して5,194百万円となりました。

④負債および純資産

流動負債につきましては、買掛債務（支払手形および買掛金）および未払法人税の減少等を主因に、当期首に比べ69百万円減少して666百万円となりました。

固定負債につきましては、円高傾向によりヘッジ会計適用による為替予約負債の増加等により、当期首に比べ127百万円増加して343百万円となり、以上の結果、連結負債は当期首の951百万円から58百万円増加して1,009百万円となりました。

純資産につきましては、上記のとおり円高傾向による繰延ヘッジ損失が108百万円となった結果、当期首の4,350百万円から165百万円減少して4,184百万円となり、自己資本比率は当期首の82.1%から80.6%となりました。

FINANCIAL STATEMENTS 2

連結財務諸表 2 (要約)

連結株主資本等変動計算書 第26期 (自2008年1月1日 至2008年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				評価・換算差額等			純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
2007年12月31日残高	918	1,221	2,199	4,339	4	6	10	4,350
連結会計年度中の変動額								
新株の発行								—
剰余金の配当			△151	△151				△151
当期純利益			104	104				104
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額 (純額)	—	—	—	—	△3	△114	△118	△118
連結会計年度中の変動額合計	—	—	△46	△46	△3	△114	△118	△165
2008年12月31日残高	918	1,221	2,152	4,292	0	△108	△108	4,184

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

科目	期別	第26期 自2008年1月1日 至2008年12月31日	第25期 自2007年1月1日 至2007年12月31日
	営業活動によるキャッシュ・フロー		454
投資活動によるキャッシュ・フロー		185	△71
財務活動によるキャッシュ・フロー		△151	△141
現金及び現金同等物に係る換算差額		△2	0
現金及び現金同等物の増減額		487	179
現金及び現金同等物の期首残高		719	539
現金及び現金同等物の期末残高		1,206	719

キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは454百万円の収入となりました。これは主に、税引前当期純利益が185百万円となったこと、特別損失に計上したのれん減損損失の戻し281百万円および売上債権による回収増が117百万円となったこと等に対し、法人税の支払による支出が207百万円となったこと等によるものです。

投資活動によるキャッシュ・フローは185百万円の収入となりました。これは主に、資金運用を行っていた定期預金および社債が満期・償還を迎えたことによる収入600百万円となったことに対し、資金運用および事業投資を目的とした有価証券取得のための支出を267百万円行ったことおよび関係会社への追加出資のための支出を110百万円行ったこと等によるものです。

財務活動によるキャッシュ・フローは151百万円の支出となりました。これは配当金の支払によるものです。

以上の結果、当連結会計年度における現金および現金同等物は当期首の719百万円から487百万円増加して1,206百万円となりました。

CORPORATE DATA & STOCK INFORMATION

会社概要/株式の状況

会社概要

(2008年12月31日現在)

商号 コスモ・バイオ株式会社
 設立年月日 1983年8月25日
 所在地 〒135-0016
 東京都江東区東陽二丁目2番20号
 東陽駅前ビル
 資本金 918百万円
 事業内容 ライフサイエンスに関する研究用試薬、機器、臨床検査薬の輸出入および販売
 従業員数 77名
 役員
 (2009年3月26日現在)
 取締役会長……………原 田 正 憲
 代表取締役社長………笠 松 敏 明
 専務取締役……………高 木 勇 次
 常務取締役……………田 中 知
 取締役……………鈴 木 忠
 取締役……………櫻 井 治 久
 常勤監査役……………村 田 実
 監査役……………佐々木 治 雄
 監査役……………堀 米 泰 彦

株式の状況

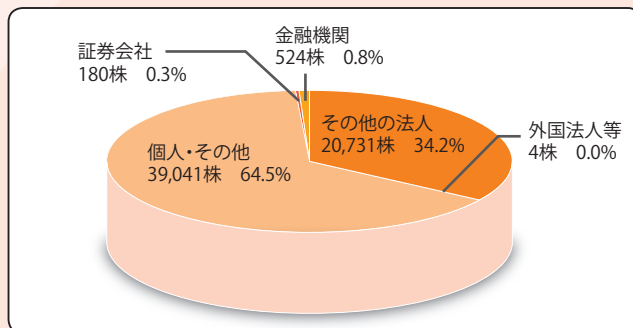
(2008年12月31日現在)

発行可能株式総数……………183,616株
 発行済株式の総数……………60,480株
 株主数……………2,495名

大株主の状況

株主名	持株数(株)	議決権比率(%)
東京中小企業投資育成株式会社	11,520	19.0
コスモ・バイオ従業員持株会	6,374	10.5
コスモ石油株式会社	5,760	9.5
福井 朗	3,000	4.9
株式会社ブルボン	2,937	4.8
原 田 正 憲	2,200	3.6
高 木 勇 次	1,480	2.4
田 中 知	1,480	2.4
鈴 木 忠	1,480	2.4
柴 沼 篤 夫	1,480	2.4

所有者別株式分布状況



株 主 メ モ

事業年度	1月1日から12月31日まで
期末配当金受領株主確定日	12月31日（中間配当金の支払いを行う場合は毎年6月30日）
定時株主総会	毎年3月
株主名簿管理人	三菱UFJ信託銀行株式会社
特別口座の口座管理機関	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
同連絡先	〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号 電話 0120-232-711（通話料無料）
上場証券取引所	ジャスダック証券取引所
公告の方法	電子公告の方法により行います。ただし、電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じた場合は、東京都において発行する日本経済新聞に掲載して行います。 公告掲載URL http://www.cosmobio.co.jp/

ご注意

- 株券電子化に伴い、株主様の住所変更、買取請求その他各種お手続きにつきましては、原則、口座を開設されている口座管理機関(証券会社等)で承ることとなっております。口座を開設されている証券会社等にお問合せください。
株主名簿管理人(三菱UFJ信託銀行)ではお取り扱いできませんのでご注意ください。
- 特別口座に登録された株式に関する各種お手続きにつきましては、三菱UFJ信託銀行が口座管理人となっておりますので、上記特別口座の口座管理機関(三菱UFJ信託銀行)にお問合せください。なお、三菱UFJ信託銀行全国各支店にてもお取次ぎいたします。
- 未受領の配当金につきましては、三菱UFJ信託銀行本支店でお支払いいたします。

○証券会社等の口座に登録された株式

お手続き、ご照会等の内容	お 問 合 せ 先	
■株主様の住所変更、買取請求その他各種お手続き	口座を開設されている証券会社等にお問合せください。	
■郵送物等の発送と返戻に関するご照会 ■支払期間経過後の配当金に関するご照会 ■株式事務に関する一般的なお問合せ	株主名簿管理人	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 上記連絡先にお問合せください。

○特別口座に登録された株式

お手続き、ご照会等の内容	お 問 合 せ 先	
■特別口座から一般口座への振替請求 ■単元未満株式の買取（買増）請求 ■住所・氏名等のご変更 ■特別口座の残高照会 ■配当金の受領方法の指定（※）	特別口座の口座管理機関	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 上記連絡先にお問合せください。 [手続き書類のご請求方法] ・音声自動応答電話によるご請求 電話 0120-244-479（通話料無料） ・インターネットによるダウンロード http://www.tr.mufg.jp/daikou/
■郵送物等の発送と返戻に関するご照会 ■支払期間経過後の配当金に関するご照会 ■株式事務に関する一般的なお問合せ	株主名簿管理人	

（※）特別口座に登録された株式をご所有の株主様は、配当金の受領方法として株式数比例配分方式はお選びいただけません。

コスモ・バイオ株式会社

〒135-0016 東京都江東区東陽二丁目2番20号 東陽駅前ビル

Tel. 03-5632-9600 Fax. 03-5632-9613